

一須少異

昔同健

新

字

古
回
一

酒 宴

定価三〇〇円

昭和三十二年十一月二十日 初版発行
昭和三十三年五月二十日 三版発行

著 者 吉田健一

発行者 小林 茂
東京都新宿区新小川町一ノ一六

印刷所 扶桑印刷
東京都品川区大井寺下町一四三〇

製本所 鈴木製本
東京都文京区東古川町一四

発行所 株式会社 東京創元社

東京都新宿区新小川町一ノ一六
電話九段(三三)八五一―一五
振替 東京 一五六五

酒宴目次

逃げる話	五
マクナマス氏行状記	三
夏は暑い	五
アドニスとナスビ	六
マツチ賣りの少女	七
沼	八
百鬼の會	二二
酒宴	二四
ロツホ・ネスの怪物	二五
國籍がない大使の話	二六
春の野原	二七

題字·裝釘
內山
雨
海

酒

宴

逃 げ る 話

晝になつた頃の食べもの屋が繁昌するのに對して、その時刻のバーががらんとしてゐて、バーよりも物置きか何かに似てゐることは、誰でも知つてゐると言ひたくても、そんなに早く開く、バーもあることは多くのものにとつてどうでもいいことに違ひない。併しさういふ一軒に入つて見れば、そのやうな感じがする。そしてこの經驗をするものは餘程の暇人か、何か特別の目的があるものに決つてゐて、その男がさうしてそのバーに来てゐるのは人目が避けたいからだつた。店を開けてゐる以上、バーの方でも客を待つ建前にはなつてゐる。だから、斷りはしないが、實際の商賣はそれから大分先になることが解つてゐるので、客に別に注意もしないし、勝手に飲みたいものを飲ませて置くといふ態度を取る。バーテンさんも、

早番の女給さんもその積りでゐるから一層、人目に付かない感じを強くして、それが場所が
がら空きなのに加り、男は暫くは自分が一人である氣でゐられた。

これはかなり貴重なことで、自分が文字通りに全く一人である時でも、さう自分一人と思
へるものではない。例へば、仕事をしてゐれば、仕事があつて、序でにそれを頼んだ人間の
ことなども頭に浮ぶ。さうすれば、その人間と飲んでしくじつたことも、或は例へば、そこ
にゐ合せた他の人間のことも思ひ出し、一人で仕事をしてゐるところか、何人、何十人とい
ふものが空に舞き合つて、しまひには、自分といふ人間はと持て餘すことにもなる。併しこ
れとは逆の場合もあるので、その男がそこでウイスキーだか、ジン・フィズだかを前に置い
てゆつくりしてゐられたのは、相手の人間が一人しかなくて、それがそこにゐなかつたから
だつた。一人の人間とどうしても顔が合せたくなければ、人間臭いことは凡てその相手に集
中して、その一人の人間がゐないだけでせいせいする。尤も、これも一種の憑かれた状態
はあるが、そのやうな時に、それに氣付く程の餘裕があるといふことは先づない。

ここならば大丈夫といふ考へだけで、男は時間が少しづつしかたつて行かないのも苦にな
らず、空白を埋めるのにやたらに飲む必要もなかつた。どうせそんなに早く店を開ける位だ
から、そこは部屋の趣向に凝るだけの實力がない極く當り前のバーで、眺へ向きに薄暗い中

に、椅子とか卓子と名が付いてゐるのに過ぎない家具が置いてあり、鉢植ゑの植物もどこかの植木屋から借りて來たらしくて、かうしてそこにゐる男も、別に誰といふことはない一人の男の客に見えた。或る役割を演じてゐると、暫くはそれになり切つてゐられることもある。男は、バーが何時に開かうと、客が入れ代り立ち代り集つて來て混雜するのはそれから半日近く先の、午後の八時か九時頃の習慣になつてゐるのは、偶には随分、有難いこともあると思つた。今流行の避暑地に眞冬に行くやうなもので、そこで會ひたくない人間に會へばもう絶體絶命であるだけ、それは大概はあり得ないことだつた。

昔は、全く暇潰しの場所がなくなつて、かういふ店にこんな時間に入つたこともあつた。その途端に後悔して、それでも直ぐに出て行くこともならず、無理に腰を降してビールでも頼めば、その一本を空にするまでと思ふだけで落ち着かないのがひどくなつた。何か當てがあつてこそ、時間がたつて行くので、ただビール一本の爲に一つの場所から離れられなくなつてゐるのならば、それは時間が止つたのも同然である。そして時間の止り方にも色々あり、これといふ當てもなしにゐるものにそれが起ると、人間にとつては時間とともに動くのが普通であるから、これは恐しく息苦しいことになる。ビールの一本が際限なくそこにあるものに思はれて來て、コップに一杯に注いだ後でも、まだ壘の頭の方が少しばかり減つただけの

やうであり、それを何度か繰り返してゐるうちに墾が空になるといふことは到底考へられない。第一、さうして何度も繰り返すといふことに堪へられるものだらうか。

そんな感じであるだけで一種の自己崩壊が始つて、さうして自分が崩れて行くのが、凡てのものが自分に注意してゐると思はれて来る形を取る。椅子が硬いのも、椅子が硬いではすまなくて、ビールの減り方が遅いのとどういふ具合にか結び付けられ、窓もわざとこつちの方に光線を送つてゐるやうで、自分の頭がそんな風に變になつてゐることが相手の女給さんに解つたらと思へば、息も止りさうになり、そして既に解つてゐる筈ではないかといふ、放つては置けない気分もそれに加る。それ故に、まだ頭が完全に狂つてしまつてゐる譯ではないのであるが、確かに正常の状態ではないことがはつきりしてゐても、それで我に返ることは出来なくて、出来ない爲に一層慌てて椅子が硬かつたり、ビールが減らなかつたりすることを強く感じる。一口に言へば、やり切れないので、そのうちにビールがなくなつてそこを出ると、自分がへとへとになつてゐることに氣が付く。そしてその上にまだ、自分が普通のことを普通に出来なかつた實感を振り拂へずにゐる。

併し今バーで飲んでゐる男には、もうそんなことはなかつた。年も、場合も違つて、どんなことをしても顔を合せたくない相手といふのは、その程度にもよるが、それがひどけれ

ば、兎にとつての狼とか、鯛にとつての鯛とか、命取りの大敵を意味する。男にはその相手がさうだつたと考へてよくて、その事實があるからには、狼を撒くことが出来た兎や、鯛の口先から逃げて岩と岩の間に隠れた鯛は邊りの景色をゆつくり眺めてゐられる。海藻は潮流に従つて揺れる影を砂の上に落し、風は草原を横切つて木立ちの下まで来て草を靡かせる。それ以外のことを考へる餘裕、といふのは、雑念を抱いて、その一つ一つをこれといふ成算もなく追つてゐるうちに、それを何か大事なことに思ひ込むいつもの悪い癖は、敵から暫くは逃げる事が出来た安心と、その敵が何れは現れることを豫期する氣持に押し出されて、これは一種の放心状態に置かれたのも同じことになる。そしてそれがなかなか得難いことになつてゐる今日、その原因を選び好みしてゐられるだらうか。

併し生憎、その次には退屈が来る。もともと我々は、何も敵に追はれる、或は、會ひたくない人間があるので逃げ廻る爲に人間に生れたのではないので、午後の三時か四時のバーといふ、先づ大概のものから安全な場所にあることがはつきりすれば、人間本來の姿に戻つて、恐い思ひをしてゐたのが恐くなくなるのは何もなくなつてしまつたのと變らないから、人間はさういふ時に今とは別なことがしたくなる。併しそれならば、することは百貨店を覗くのから人殺しに至るまで幾らでもあつて、それをしないでここに來た理由がある譯だつた。だ

から、かうしてゐるのであつても、かうしてゐれば退屈である。このやうな際には、文庫本の論語などを出して聖賢の道に親むのも一つの方法であるが、それには生活様式や行爲の系統が違つてゐる。呻きでもする他ない所で、そんなことをすれば、女給さんやパーテンさんに怪まれる。女給さんは、男が一人であつたらしい様子なので、時々お代りの飲みものを持つて來ては、パーテンさんがあるスタンドの方に行つてゐた。併し男が變な聲でも出せば、病氣になつたのかと思つてパーテンさんと男の方を振り向くのに決つてゐた。

退屈も一種の不安定な状態である。何もする氣が起らないか、或は大概のことをしては危険な時に、何かしなくてはゐられなくなるのだから、不安定なのは當り前で、さうなると、凡てがそれまでとは逆になるのも止むを得ない。鱒が入つた譯で、それでは海藻が潮流にそよいでも、ただそれを無心に眺めてゐる餘裕が退屈の爲に持つて行かれて、海藻に隠れて見えない向うの方はどうかといふ心配も起きて來る。さうして頭を使ふことも、退屈を紛らしたい要求から生じる自然の結果なのかも知れないが、使ひ出せば頭はその線に沿つて動いて、退屈がその後押しをするから、そんなことをと打ち消してもとの退屈に戻る氣遣ひはない。さうすると、そのもつと前にあつた状態を繰り返して又そはそはし始める他なくて、パーにゐる男も、いつまでもそこにさうしてはゐられないと今更のやうに腰を浮かせる羽目になつ

た。男の退屈してゐる精神にとつては、これは思ふ壺である。

時間の問題ではなかつた。まだ勤めの人は勤め場所に、學校の先生は學校にゐてその日の仕事をしてゐる頃で、パーその他が込み始める夕方以後までには遠かつた。併し苦になり出せば、それは安心する口實ではなくなつて、避暑地に冬行くのが人に會はない上で賢明かどうかは見方による。そこまで人が來ることは滅多にないと判斷するのと、來たらおしまひだとびくびくするのは、その時の氣分次第であつて、男は退屈してゐた。そこにさうしてゐるのがいやならば、それが危険な理由は幾らでも頭に浮んで來る。相手が丁度そこを通り掛つて、ひどく喉が渴いてゐれば、ただそれだけの爲ならばかういふ、晝間店を開けてゐる位寂びれたパー程、恰好なものはない。それに思ひ當ることは、相手が今パーの外に立ち止つて、これから中に入つて來る積りでゐる所を想像するやうなものである。退屈どころではなくなつて、男はいきなりそこから飛び出したのを我慢しなければならぬ所まで事情が逆轉してゐた。

飛び出した途端に入つて來ようとしてゐる相手にぶつかつたらと思へば、手足もすくむ。併し恐怖もそこまで行くとは反省に近いものを生じて、その時はその時と思ふ決心も付く。そしてそれで落ち着かない氣持が解消する譯ではないので、その位のことですむならば、晝間

バーに行つて退屈したり、そはそはしたりすることはない。一つの問題が何となく片付いたやうに見えれば、次の問題がもうその代りに前と同じ場所を占めてゐて、それよりも、問題らしいものが幾つも同時に頭の中で押し合ひ、その一つ一つに就て考へるところではなくて、結局は、大變だといふことに要約される。男は、ジン・フィズがまだ半分ばかり残つてゐるのを見て、ビールを一本空けるのに苦勞した昔の氣持に似たものさへ感じ、併し今はもうそんなことに構つてゐられる時ではないから、女給さんを呼んで勘定を頼んだ。そしてお釣りだとか何だかだで待ち切れないのを紛らすのに、残つてゐるジン・フィズは瞬く間に飲み乾した。だから、その點では、少しも心配することはなかつたのに、そのことに改めて思ひ當りもしないのが、かういふ時の慌て方といふものである。出口のことも問題ではなかつたので、男は、その裏の便所に行く方の戸の外がその裏口へ抜ける廊下になつてゐたら、そつちから往來に出た。女給さんやバーテンさんは、男が便所から戻つて来るのを暫く待つてゐたに違ひない。

相手と本當の出口の所で顔を合せることが氣になつてゐれば、同じ偶然から裏口にその相手がゐるかも知れないといふことは頭に浮ばないものである。男はすつかり、バーに相手が入つて来る危険から逃れた積りになつてゐて、殆ど命拾ひをしたのに近い安心を覺えて歩い

て行つた。店の窓にネクタイが並べてあれば、近寄つてあれこれと品定めをして、その時相手が後から現れて男の肩を叩きでもしたら、どうする積りだつたか解らない。人間には恐怖とか、息苦しさとかを感じる上でも一定の限度があるやうであつて、益々恐くなるのがいつまでも續くといふことは稀にしかないものである。又さうなれば、發狂するか、死ぬかのどつちかで、話の初めに主人公をそんなことにしてしまつては意味がない。要するに、男はバーで大難を免れたと勝手に決め込み、雲雀だの、死一等を減じられた死刑囚だのと、これも全く勝手にいい氣持になつてゐた。

その上でバーに行つた方が、當人の感じにびつたりしてゐた筈だとも考へられる。併し男にとつては、今はバーは警戒しなければならぬ所で、前とは逆の論法から、多勢のものが集つてゐる所は却つて人の目に付き難いといふ理由で大きなビルの地下室にある大衆食堂を選んだ。近代的な設備の粹を誇る料理の殿堂といふやうな觸れ込みでも、一坪何百萬圓に當るか解らない地面を生かして儲るだけの商賣をするのには、なるべく狭い場所に澤山の椅子や卓子を詰め込んで收容人員を増す算段をしなければならなくて、そこも階段を降りて行く途中から見ると、ただもう卓子を圍んでゐる人間の海だつた。確かに大きくて色ガラスその他で飾り立ててある所が殿堂で、近代的な設備の方は、擴声器が呼び出しと蓄音器を兼ねて

ゐたりして、そこは實際に安全であるよりも、氣を紛らせるのに適してゐる點で男が求めてゐる條件を凡て揃へてゐた。

客が互に話す聲だけでも、相當なものである。そこへ女の子が注文のものを持つて來たり、客が立つた後を片付けたりしてゐて、客の方も始終出たり入つたりし、空いた卓子を探して廣い食堂の中をぐるぐる廻つてゐるのも幾組もあつた。そしてその上を蓄音器が擴聲器を通してがなり立て、食器がかち合ふ音も他の音に混じつて邊りを賑かにしてゐた。男は、もし擴聲器で自分の名前が呼ばれたらとも思つたが、相手はそんなへまをする人間ではなかつたし、それにここでは兎に角、さういふことは考へられなかつた。お婆さんが三人でハヤシライスをつつ突いてゐた。子供連れで來てゐる一組の卓子では子供が泣き出して、しまひに母親が子供を抱いて卓子と卓子の間を行つたり來たりし出した。併しその泣き聲も騒音の一部としてしか聞えない位で、かういふ中で例へば、向うに友達があるのを見付けなどすることは、國電の人込みに揉みに揉まれて知つてゐる人間にぶつかると同じ位、思ひも寄らないことである。

友達とか、敵とかいふものは、少しは我に返つてゐる時でなければ頭に浮ぶものではない。所謂、取り卷きが多勢ゐるのが好きな人間に友達が少いのはその爲で、そして敵がどうにも